

2021/10/03

コロサイ人への手紙 1 章 1-8 節

感謝と福音

1:1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、1:2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。1:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。1:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。1:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。1:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。1:7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、1:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。

他人の成功を見た時、皆さんはどう反応しますか？嫉妬しますか？それが自分ではないことに立ち立ちますか？その人の成功を喜びますか？それが自分ではなくても、成功と聞いたら嬉しいですか？正直に言って、他人が成功していたら、少し嫉妬してしまうことが多いことでしょう。それは子どもによく見られます。子どもは、たいていいつも自分の身近な人がおもちゃを手に入れると、自分がもらえないことに嫉妬します。罪深い心のために、私たちは他者を喜ぶことが難しいと感じます。しかし一方で、他者の成功を目にして嬉しく思うことがあるのも確かです。それは身近な人や自分が指導した人が成功した時です。競争は関係なく、成長の過程として誰かが前進するのを見るのも嬉しいものです。今日読む御言葉では、パウロはコロサイの教会のことを神に感謝しています。パウロはいつも、場所やコミュニティにおいて福音が働く様子を神に感謝しています。けれどもこの時、パウロは教会を立ち上げるためにコロサイに行っていませんでした。他の人が彼らに福音を述べ伝えたのです。教会は使徒たちの教えに基づいて組織されましたが、ペテロやパウロから直接教えられたわけではありませんでした。人間的に言えば、自分がその教会を立ち上げたのではないことにパウロが嫉妬してもおかしくはなかったのですが、代わりにパウロは、その教会の設立を主に感謝しました。特にパウロはコロサイの教会が福音を信じ、それに則って生きていたことについて神を誉めたたえました。

福音を信じるというのは神の恵みあふれる働きです。福音はそれ自体、多くの人にとって馬鹿げて聞こえるからです。神がご自身の子を反逆者である罪人のためにお送りになって、救いは御子の名によって神を求める者には誰でもただで与えられるというのです。簡単すぎるようにも聞こえますが、実際は死にも及ぶ深刻なもので、聖霊によって人生の全てを変えていただくことが必要です。外見だけ見て、その人がクリスチャンだと言うのは簡単ですが、心の中の神の働きは見るのが難しいものです。それは、その人の意欲や、究極的には生き方の変化によって表れてきます。私たちの主イエスに

において救いは完全であっても、私たちはクリスチャンとして成長しなければなりません。新しい生き方を学ばなくてはならないのです。コロサイ 1:1-8 で、パウロは、コロサイの教会が福音を信じ、信仰、希望、愛にあって福音の実を結んでいることを、神に感謝しています。私たちが自分たちの信仰、希望、愛において成長することを感謝するように、他の教会での神の働きに対しても神に感謝しようではありませんか。それは福音を信じ、それに則って生きようとすることです。

1. 背景と感謝(1-3 節)

御言葉に目を向ける前に、背景にあることを少し把握しておく必要があります。コロサイは、現在のトルコにあたる、古代小アジアの南西部にあった小さな町です。一時は織物貿易の中心となった場所ですが、コロサイ人への手紙が書かれる何年も前に通商路ではなくなっていました。ですからその地域で重要な町と言えばエペソでした。コロサイ 2:1 によると、パウロは、この教会を訪れたことなかったことから、コロサイ人への手紙は、ローマ人への手紙と似ています。パウロは自分があまり知らないクリスチングループを励まし、教えるために手紙を書きました。パウロはエパfrasやその他の人たちからその教会の情報を得ていましたが、教会に影響しつつあった偽りの教えが起こった時に手紙を書きました。彼らが直面している困難について話し始める前に、パウロは彼らのことを神に感謝しています。パウロはこう言いました。

「1:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。1:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。...この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」

パウロが感謝していたのは、コロサイ人たちが福音を信じ、多くの福音の実が現わされていたからです。彼らは信仰と希望、愛を形にしていたのです。

2. 信仰(4 節)

信仰は、クリスチャンの美德の中でも必須のものです。信仰は時に定義することが難しいですが、基本的な意味は、義と認められること、聖化、永遠のゆえにキリストにおいてのみ安らぐこと、またそれを受け入れることです。もしくは言い換えれば、信仰とは人生のすべてをイエスの御手に委ねることです。信仰について話す時、「知識」「信念」と言った言葉と比較されることがあります。これらの言葉は、意味合いが混ざって使用されることがあるからです。その意味のほんの少しの違いは、何か（例えば職場の人の名前）を知っているだけなのか、その情報が正しいと信じているのか、職場や外でその人を見かけた時に呼びかけられるくらい十分にその情報を信頼しているかということに分かります。その違いは、私たちが真実だと思っていることは、それに沿って自分の人生を築き上げるのにふさわしいかどうかということに分かるのです。コロサイ人たちは、明確にイエスを囲うようにして人生を築き上げていました。彼らの主イエスへの信仰の証は、人々の話題にのぼるほどでした。今日の聖書箇所から、エパfrasはもちろん他にもパウロにコロサイ人たちのことを話した人がいたことが分かります。コロサイ人たちは寛大で、献身的で、心からイエスに信仰を置いていました。主イエスに信仰を置くということをしつくり考える時、イエス・キリストという方とその働きを思い起こすべきです。信仰は神からの賜物です。私たちは自分たちで作り出すことも、自分で信仰を保つこと

もできません。聖霊が私たちの生活において信仰を成長させ、私たちが弱い時に支えてくれます。けれども私たちも自分の信仰をかきたてなければなりません。神の偉大な愛を頻繁に思い起こしましょう。神が、私たちの救い主となるべくどのように御子を送ってくださったのか、いかにイエスは使徒たちに教えられたのか。どのようにして福音が世界中に広がり、私たちをもイエスへの信仰へと導いたのかを。私がここで示してきた信仰に沿って、この重要な要素を心に留めてみてください。信仰はただの信念ではありません。それは、イエスを信じることです。信仰には対象が必要です。信仰に信仰は置きません。初めて福音を受け入れた時と同じ熱意、感動、謙虚な気持ちを維持するために、イエスが誰なのかを思い起こさなければなりません。

3. 希望(5 節)

もう一つの重要なクリスチャンの美德は希望です。希望とは、今は持っていないくとも、将来確かにやってくるものに目を注ぐことです。クリスチャンの希望ではない希望があります。何かに対する盲目的欲求、もしくは自分に約束されていないものへの期待です。クリスチャンの希望は異なります。クリスチャンの希望は、将来の神の約束に目を向け、それを信じるだけではなく期待します。希望が彼らを待っているのです。希望は既に成就された約束のように生きています。ですから、真の信仰と希望はセットであるべきです。神の御国の到来を楽しみにすると同時に希望が湧き出ることなくして福音に信仰を置くことはできません。私たちには永遠の将来があります。永遠の故郷があります。世を治める永遠の王がおられます。痛みも、紛争も、不義もないことを、永遠の平安を楽しみにしています。彼らのために「天にたくわえられている望み」に注目していたのが、コロサイ人の証となる場所でした。彼らは聖徒たちを愛し、イエスに信仰を置きました。彼らにはこの希望があったから、この世の生活に対処する時も、それに耐えることができ、また自分たちの希望を裏へと変えることができました。将来への希望を持っていたからです。皆さんにとってどうか分かりませんが、私はこれにとっても励まされ、鼓舞されます。将来への希望はこの世での彼らの人生を助けただけではなく、実際に信仰と愛へとかきたてたのです。彼らは福音をより信頼し、もっと完全に愛しました。彼らの心は天にあったからです。私は主の晩餐の意味に思いを注いでいます。聖餐にあずかる時、私たちは思いを将来へと向けている、という考えがずっと私の心をつかんできました。私たちは御国でイエスと天の食卓にあずかります。私たちはイエスがこの世に正義をもたらすために戻ってこられるという希望を告げ知らせしているのです。イエスが再び来られるという希望を持って生きるならば、イエスが地で私たちのいのちを、教会を、そして世を治められるようにと求めながら生きることになるのです。

4. 愛-(4 & 8 節)

では次は愛に注目してみます。愛はクリスチャンの最高の美德です。イエスは、イエスに従う者の特徴は互いへの愛であると言われました。また新約聖書は、クリスチャンが互いに愛し、愛の内に成長するための戒め、教え、奨励に満ちていて、愛を欠くことは深刻なことであると警告しています。クリスチャンの愛には縦横の関係があります。私たちは全身全霊で神を愛し、また隣人を自分のように愛さなくてはなりません。愛とは、単なる感情と言うよりは、献身と奉仕の意味合いを強く持ちます。けれども一度互いに仕えはじめれば深くつながっているという感情も沸き起こるものです。自己犠牲、赦し、また自分をよく扱わない者に対しても良いものを望む（虐待を耐えるべきということではありません）ことにおいて愛を見ることができます。愛は自慢しません。愛はいつも他者にとっての善を

求めます。実際には誰かを愛することは思慮分別に関わることですが、どう愛すればよいのか私は明確に提示できません。ある人は友が辛い時に手を差し伸べるのが愛のある行動だと思っても、状況によって・人によっては、友が最善を自分で見出すようにすることがより愛のある行動だと思うかもしれないからです。エパfrasが彼らの愛は「御霊による愛」だとパウロに言ったほど、すべての聖徒を愛したことにコロサイ人の証が現れていました。コロサイ人達は、ユダヤ人と異邦人という分け隔てもしていなかったことでしょう。また他の地域の聖徒たちを支えることにも貢献していたとも考えられます。それがパウロの手紙の中で、愛について一番強調されて繰り返されているテーマだからです。彼らの愛は、彼らの信仰と希望と同じ場所、つまりイエスのうちに据えられていたのです。彼らが聖徒たちを愛したのは、福音を聞いたから、そしてイエスが教会に約束されたことが将来すべて成就することに目を向けたからです。愛はクリスチャン生活にとって非常に重要です。イエスを十字架へと突き動かしたのは愛だからです。そもそも愛こそが、イエスがこの世に来られた理由です。私たちは他のどの美德よりも愛を重んじるべきです。私たちの愛は試されると同時に教えられる必要があります。見返りを期待することなく、他者に仕え、関わって行くべきです。祈って御言葉を学ばなければなりません。そうすれば、愛がどのようなもので、どのように愛すれば良いかが分かるからです。

結論と応用

パウロの感謝の背景にある個々の理由に注目しすぎると、感謝の祈りの真のテーマからそれてしまいます。パウロの祈りの全体的な意図は、このようなことを可能にくださった神への賛美です。福音が根ざし、教会と世に実りをもたらすのは、新約聖書で見られる証の中でも最も素晴らしいものです。もっと言えばそれはクリスチャンとして目にできる最高のことです。日本では教会が育っていない印象があり、キリストにより頼むのは自分たちだけのように思えることが多くあります。キリスト者として私たちは確かに少数ですが、私たちが孤独で教会は衰退していきただけというのは誤りです。コロサイの教会を見てください。彼らはパウロの訪問を受けたことはありませんでしたが、彼らは福音を信じてその美德を形にしたからこそ、繁栄していました。福音がその教会の人たちに救いをもたらし、彼らの周囲の人や場所に信仰、希望、愛をもたらしたのです。私たちもこのようなことに励むことができます。私たちも周囲の教会のために祈り、可能な限り協力することで、コロサイの教会に対してパウロが持った態度を見習うべきです。教会同士の競争なんてものはありません。少なくともあるべきではありません。私たちは皆、イエスが道であり、真理であり、いのちであるということに世に告げ知らせることを目標としています。一度信仰にあずかり、聖徒となったなら、私たちは同じチームなのです。協力する機会があまりなかったとしても、周囲の教会のために定期的に祈っているべきです。関西、日本、世界の教会の家族を神が祝福し、成長させ、信仰、希望、愛において増し加えてくださるよう願うのです。

最後に、私たちは人生において福音の実をはっきりと表すよう努力していくべきです。信仰、希望、愛を持つ理由を思い起こすべきとお話しましたが、自分たちの状況にこだわる代わりに神を見上げることが私たちにとってどれだけ重要かということは強調してもしきれません。私たちは実際、喜びの種を沢山持っており、将来に希望を持つ理由を数えきれないほど持っているのです。イエスは、彼に信頼する者は失望させられることがないと言われました。周囲の人から嫌われるかもしれませんが、イエスは私たちを決して離れず、捨てることもありません。ヨハネ第一 1 章 8-10 節には、も

しも私たちが罪を言い表すなら、神はその罪を赦すとあります。イエスは私たちを離れてから、また戻って来られるまで私たちと共におられるために聖霊をお送りになりました。イエスが戻られる時、やっと完全に神の子としての場所に連れて行っていただけます。希望のない人生を歩むのはやめましょう。冷たい心を持って人生を歩んではいけません。イエスを見上げましょう。福音を知り、信じましょう。イエスのうちに信仰、希望、愛をもって生きましょう。